

中国日本商会

みつま

三潞先生の 「ナルホド中国、ナットク中国」



三潞コラム 中国「津津有味」-53

日々刻々と変化する中国。どこからどうやって情報を手に入れたらいいのか、とよく講演で質問されます。「それにはまず人民日報をじっくり読むことです」と言うと、「人民日報は中国共産党の機関紙、それで真実が解るのでしょうか」と疑問を投げかけられます。当然の疑問でしょう。勿論、人民日報だけで事足りるはずはありません。しかし、読み方を変えると実に様々な事実が透けて見えてきます。ではどういう読み方をしたらいいのでしょうか。事例を挙げて解説しましょう。

人民日報は今、平日で20面、土日や祝祭日は8面です。紙面構成は、平日の場合で見ると、まず、一面の人民日報という題字の下は、習近平氏の動向や発言、またはそれに沿った重大な政策に関する記事が掲載されます。2面からは「要聞」というページが3~5面ほど続き、その後、理論・経済・政治・文化・社会・生態・国際などのページが続き、更に、産業経済・消費・体育・法治・民主政治・新農村・記者調査・科学技術・党建設・軍事・視覚等々様々な紙面が曜日別あるいは適宜設けられ、最後は必ず副刊で、文岳・芸術・学術的な紹介や評論を掲載します。もちろんこれは最近の構成で、私は40年来人民日報を精読していますが、時期によっていろいろな変化があります。以上を前知識として読み方を考えます。

まず、1面からわかる事をいくつか挙げましょう。題字の人民日報は赤字です。しかし、以前にも述べましたが、これが黒字になる時があります。私の記憶では、2008年の四川大地震の時と、今回のコロナに関連した4月の清明節の時で、国家的な服喪を意味します。

一面は様々な政治関係も示します。胡錦濤政権前半、江沢民氏がまだ中央軍事委員会主席だった当時は、1面の右肩には常に解放軍報の記事や江沢民氏の動静が掲載され、胡錦濤政治ににらみを利かせていました。日本との関係が悪化していた時期は、抗日・反日記事を除けば、日本関係の記事が一面に載ることはありませんでしたが、2017年5月の二階氏の訪中が大々的に報じられたり、同年12月29日にはなんと一面右肩に、中日与党交流メカニズム第7回会議に出席した日本側代表と習近平氏が会見した記事が掲載されたことは、日中関係の修復に中国側が本格的にゴーサインを出していることを印象付けました。

国家間の関係の中で、それぞれの時期に日本と韓国をどう扱っているのかも読み取れます。同じような記事について、日本関係を上にするか韓国関係を上にするか、微妙にその時の中国政府のプライオリティを反映し、大変意味深長です。

国内の動向も如実に現れます。最近まで国家副主席だった李源潮氏は共産主義青年団の出身でしたが、その動静が一面に載ることは一貫してありませんでした。一方で、習近平氏の盟友であり、腐敗摘発の先頭に立っていた、現国家副主席王岐山氏の動静はほぼ一面

中国日本商会

みつま

三渚先生の 「ナルホド中国、ナットク中国」



に掲載されています。ただ、このところ露出度が減ったことは多少気がかりではあります。また、本コラム 47 でも紹介したように、新型コロナ騒動で一面トップが新型コロナ記事になったのは 1 月 26 日で、その日からは常に一面に関連記事が載り、2 面は連日全面が関連記事で埋め尽くされました。そこから政府の思惑を鮮明に読み取ることができます。

今回はこの続きを。